

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P5086 参照



※ P5082 参照



※ P5094 参照

2018.9
No. 737

目次

〔大学の動き〕

- 部局長の交替 5082
- 名誉教授懇談会を開催 5082
- 第71回京都大学未来フォーラムを開催 5083
- 第5回京都大学—稲盛財団合同京都賞シンポジウムを開催 5084

〔部局の動き〕

- チュラロンコン大学薬学部長が薬学部を訪問 5085
- ユネスコチェア設立記念国際シンポジウム
～水・エネルギー・防災分野における持続可能な開発～を開催 5086
- 第27回 KAIST-KU-NTU-NUS (KKNN) 環境工学シンポジウムを開催 5087
- 台湾漢学講座を開催 5088
- 第18回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を開催 5088

〔寸言〕

- 京, 上方 林 正孝 5090

〔随想〕

- 出前授業「宇宙太陽発電所」 5091
- 名誉教授 橋本 弘藏

〔洛書〕

- 力は断層を動かし、そして大地を動かす 5092
- 林 為人

〔話題〕

- 平成30年度総長杯（卓球大会）を開催 5094
- 北部構内「子ども見学デー2018」を開催 5094



京都大学



大学の
動き

部局長の交替

(新任)

医学研究科長・医学部長

岩井一宏 基礎・社会医学系(大学院医学研究科)教授(細胞機能制御学)が、上本伸二 医学研究科長・医学部長の後任として選出されました。任期は平成30年10月1日から平成32年9月30日まで。



[目次に戻る ↗](#)

名誉教授懇談会を開催

6月27日(水)、百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて名誉教授懇談会を開催し、81名の名誉教授のほか、総長、理事、副学長、監事、部局長等合わせて106名が出席しました。

懇談会は、山極壽一 総長による本学の近況を交えた挨拶に続いて、異友正 名誉教授による乾杯の発声により始まりました。

会場では、出席者それぞれの在職当時の思い出や出来事、近況報告等に話が弾み、盛会のうちに執り行われました。



乾杯の発声をする異名誉教授 挨拶をする山極総長



懇談会の様子

(総務部(総務課))

[目次に戻る ↗](#)

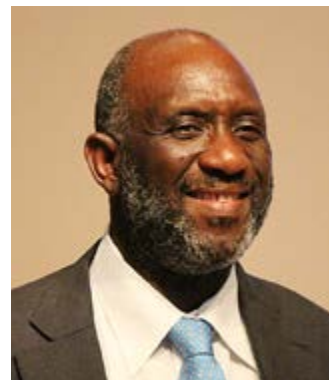
大学の
動き

第 71 回京都大学未来フォーラムを開催

今回の京都大学未来フォーラムは、工学研究科博士課程修了生のウサビ・サコ 京都精華大学長を講師に迎え、6月15日（金）に百周年時計台記念館において開催しました。

「多様化する現代コミュニティと建築空間 — 明日の地域社会のあり方を考える」と題した講演の中でサコ学長は、出身国であるマリ共和国の教育方法や中国・日本での留学体験談、京都精華大学での教員・研究者として感じた日本社会の様子を紹介しました。そして、台所を例に、調理器具があるからそこが台所となるのではなく人が調理をするからそこが台所になるのであり、スペースは人の行為があって出来るものであることや、マリの首都バコマの中庭型在来住宅や現在携わっている京都市空き家再生プロジェクトの「本町エスコーラ」を例に、コミュニティは形成 — 崩壊 — 再生を繰り返すものであると説明しました。最後に、さまざまな研究に関心を持つことが自分のテーマとの出会いのきっかけとなり、研究テーマが一定でないことが新しい研究を生み出すアドバンテージ（利点・代謝）になると語りました。

参加者からは、「文化的、学術的バックグラウンドの異なる先生の話に引き込まれ、大いに学ぶところがありました」、「その土地の歴史や生活、文化に密着した建築であるべき…という考え方に共感出来た。全体を通じて、テンポよく、ユーモアも交えた講演でとても良かった」、「最近コミュニティ論が活発になっていると感じており、建築をふまえた地域コミュニティの話の聞けてタイムリーだった」などの感想が寄せられました。



講演するサコ学長



会場の様子

（総務部（渉外課））

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

第5回京都大学－稲盛財団合同京都賞シンポジウムを開催

「京都大学－稲盛財団合同京都賞シンポジウム」(KUIP: Kyoto University-Inamori Foundation Joint Kyoto Prize Symposium)は、京都大学で2014年から毎年開催してきましたが、5回目となる2018年からは会場を東京に移し、7月22日(日)に有楽町朝日ホールで開催しました。

シンポジウムでは、「生命の神秘とバランス」を統一テーマとして、2012年に京都賞基礎科学部門を受賞された大隅良典 東京工業大学科学技術創成研究院荣誉教授を中心に、福岡伸一 青山学院大学総合文化政策学部教授、長田重一 大阪大学免疫学フロンティア研究センター荣誉教授、森 和俊 理学研究科教授の4名が、一般市民、学生、研究者など合わせて約550名の参加者に対し、それぞれの研究成果や最先端の話題などの興味深いテーマについて語りました。また、講演者の意向を反映し、高校生枠を設けた今回は、参加者の約半数が高校生であったことから、講演者からは若い世代に向けたメッセージも熱く語られました。

講演後、福岡教授をモデレーターとして、講演者と山極壽一 総長によるパネルディスカッションが行われ、各講演者の講演内容や事前に寄せられた高校生からの質問を元に、「生命とは何か」という根源的なテーマで語り合い、大変考えさせられる興味深いディスカッションとなりました。

聴講者からは、「ワクワクした。とても興味深く、かつとても示唆に富む内容でした」、「先生方のお話の中で、高校時代から生物を勉強していたわけではないという事を聞いて、わたしも物理だけを学ぶのではなくもっと視野を広げてみようと思いました」、「それぞれの研究者の方々の熱い思いが伝わってきました。若い学生たちにその思いが届いていることでしょう」、「生命の神秘が次第に解きはなたれてきたこと、各先生方のおはなしはとても勉強になりました。フェルメールのおはなしとても良かったです」、などの感想が寄せられました。



パネルディスカッション



集合写真

(総務部(渉外課))

[目次に戻る](#)



チュラロンコン大学薬学部長が薬学部を訪問

7月6日(金)、Rungpetch Sakulbumrungsil チュラロンコン大学薬学部長ら6名が、薬学部を訪問されました。チュラロンコン大学薬学部では、薬学部に加えて、医学部とも今後の教育研究で協力関係を築きたいという意向により、中山和久 薬学部長のほか、上本伸二 医学部長、高折晃史 医学部国際交流委員会委員長、伊佐 正 医学部教授と、お互いの学部の紹介や他大学などとの交流状況等についての説明の後、今後の協力関係について意見が交わされました。

その後、チュラロンコン大学出身の薬学研究科の3名の大学院生の所属研究室を見学され、大学院生やその指導教員からの研究等に関する話を興味深く聞かれていました。



集合写真



研究室見学の様子

(大学院薬学研究科)

[目次に戻る ↗](#)



ユネスコチェア設立記念国際シンポジウム～水・エネルギー・防災分野における持続可能な開発～を開催

本学に水・エネルギー・災害研究に関するユネスコチェア（京都大学ユネスコチェア WENDI）が設立されたことを記念して、7月30日（月）にキックオフシンポジウムを京都大学国際科学イノベーション棟にて開催しました。

シンポジウムは山極壽一 総長の開会の辞から始まり、池原充洋 文部科学省文部科学戦略官（国際）・日本ユネスコ国内委員会副事務総長の祝辞に続いて、松木洋忠 国土交通省水管理・国土保全局河川計画課国際室長の祝辞をいただいたあと、寶 馨 総合生存学館長が WENDI の紹介を行いました。



山極総長



写真左から、池原文部科学省文部科学戦略官（国際）・日本ユネスコ国内委員会副事務総長、松木国土交通省水管理・国土保全局河川計画課国際室長、寶総合生存学館長、司会進行役を務めた吉川みな子特定准教授

その後、4つのセッションが行われ、各セッションにおけるテーマに基づきユネスコチェアおよびユネスコセンターを代表する人々によるプレゼンテーションの後、ディスカッションではフロアからの質問や意見を挟みつつ、WENDIのポリシーについて活発な議論が続けられました。

最後に、稲葉カヨ 理事・副学長による閉会挨拶があり、盛況のうちに終了しました。

31日（火）は、テクニカル・エクスカーションとして、京都の世界文化遺産文化財防災設備の視察のため、清水寺や宇治平等院などを巡りました。



講演者・登壇者と参加者の記念写真



テクニカル・エクスカーション。清水寺周辺地域にて文化財防災設備の視察

（大学院総合生存学館（思修館））

[目次に戻る](#)

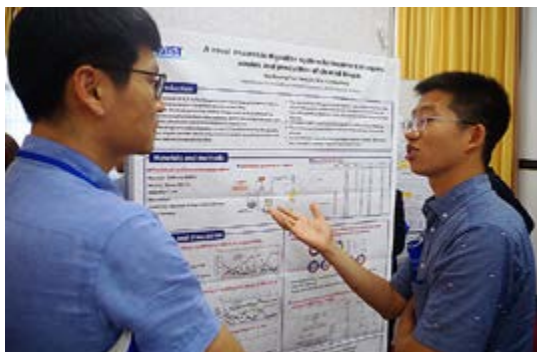


第27回 KAIST-KU-NTU-NUS (KKNN) 環境工学シンポジウムを開催

第27回 KAIST-KU-NTU-NUS (KKNN) 環境工学シンポジウム(主催:地球環境学堂,共催:工学研究科都市環境工学専攻)を,7月5日(木)および6日(金)に,京都大学百周年時計台記念館にて開催しました。本シンポジウムは,韓国高等科学技術院(KAIST),京都大学(KU),国立台湾大学(NTU)および国立シンガポール大学(NUS)の4機関で環境工学分野の最新情報の交換を目的に毎年行われています。今回は京都大学が担当となり,海外各機関から12~15名,関係者を含め全体で111名の参加を得て実施されました。学生の国際学会経験とネットワーク形成にも重点を置いており,かつて発表した学生が教員等となり,環境工学の研究分野を牽引しています。

本シンポジウムは,藤井滋穂 地球環境学堂教授の開会の辞で始まり,4セッション20件の口頭発表と2セッション33件のハイブリッド発表(短時間口頭発表とポスター掲示)により,水関連問題,地球温暖化問題,上下水処理,廃棄物管理などについて最新の研究成果発表と活発な意見交換が行われました。

初日のレセプションはカフェレストラン・カンフォーラにて開催されました。はじめに,北野正雄 理事・副学長から祝辞があり,その後,4機関の教員・研究者・学生間で親睦を深めました。翌日は午前中の研究発表の後,午後からは京都大学の研究施設見学を実施しました。最新の環境質分析・管理,処理技術等について理解を深める機会が得られました。その後ガラディナーが開催され,本シンポジウムの総括,プレゼンテーション賞・ポスター発表賞の授賞式および次年度のシンポジウムの紹介などが行われ,参加者は次年度の開催地である台湾での再会を約束し,盛況のうちに閉会となりました。



ポスター発表での活発な意見交換



レセプションの様子(中央:北野理事・副学長)



集合写真

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る ↗](#)



台湾漢学講座を開催

京都大学図書館機構および人文科学研究所は6月26日(火)、人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センターにおいて、台湾漢学講座を開催しました。

東アジア人文情報学研究センターには、台湾国家図書館と京都大学図書館機構との学術交流協定に基づき、台湾漢学リソースセンター(Taiwan Resource Center for Chinese Studies, 略称 TRCCS)が設置されています。TRCCSは国家図書館から図書の寄贈を受け入れるほか、台湾漢学講座を定期的に開催します。

今回は、引原隆士 図書館機構長、羅國隆 台北駐大阪経済文化弁事処文化教育課長の挨拶に始まり、祝平次 台湾・清華大学中国語文学系副教授による講演「The Digital Humanities in Taiwan: Past, Present and Future」が行われました。講演終了後、Christian Wittern 人文科学研究所教授の司会により意見交換が行われ、参加者にとって有意義な機会となりました。



祝副教授



記念撮影

(人文科学研究所)

[目次に戻る](#)

第18回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を開催

医学部附属病院(以下、京大病院)は、7月27日(金)に第18回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を芝蘭会館で開催しました。同研究会は、京大病院での iPS 細胞、ES 細胞および体性幹細胞などを用いた再生医学研究の向上および成果の普及を図り、医療の発展に貢献することを目的として2009年11月に発足しました。

研究会では、稲垣暢也 病院長の開会挨拶後、蒲原正純 アステラス製薬株式会社 IRM サテライトオフィス長が「アステラス製薬における再生医療研究の取り組み」について一般講演を行いました。また、河本 宏 ウイルス・再生医科学研究所再生免疫学分野教授が「iPS 細胞技術を用いたがん抗原特異的キラー T 細胞の再生—他家移植の系で使える T 細胞製剤の開発—」、荒岡利和 iPS 細胞研究所増殖分化機構研究部門長船研究室研究員が「ネフロン前駆細胞を用いた腎疾患に対する再生医療の開発に向けて」、吉田善紀 iPS 細胞研究所増殖分化機構研究部門准教授が「ヒト iPS 細胞を



研究会で開会挨拶を行う稲垣病院長

部局の
動き



特別講演を行う江藤教授

用いた血液疾患の病態解析と創薬に向けた研究」と題して、それぞれ学術講演を行い、参加者は最新の研究成果に熱心に聞き入りました。

引き続き、江藤浩之 iPS細胞研究所臨床応用研究部門教授が「iPS細胞からの血小板産生“ビトロ培養技術から臨床試験まで”」と題した特別講演を行いました。講演後の質疑応答では活発な議論が展開され、研究会は盛会のうちに終了しました。

(医学部附属病院)

[目次に戻る ↗](#)

寸言

京，上方

林 正孝



私は上方生まれの上方育ちですが，京都大学を卒業後，東下りをして電機メーカーに就職。以来約40年を経て，結局東国の暮らしの方が長くなってしまいました。その間，母校京大とは決して密接な関係があったわけではありません。けれども，この稿を書くにあたり，少々思いを巡らしてみると，最近ではiPS細胞研究所の活躍に密かに喝采を送り，総長の「国立大学の法人化は失敗だった」と歯に衣を着せぬコメントに溜飲を下げ，吉川一義さんのブルースト「失われた時を求めて」の詳注版全訳（あと2巻で完結！）を毎巻楽しみに読みと，それなりに緩い関係がある事に気づきました。私にとって母校とは「遠きにありて思ふもの，そして時々思ひ出すもの」なのでした。

過去の小欄の執筆者の誰もが触れている様に，京大は自由な校風です。京都と言う中央から離れた場所がそうさせるのかもしれませんが，もうひとつ京大の特徴を付け加えるなら，自由だからこそ生じる「ユーモアのセンス」だと思います。少し前に話題になった「タテカン抗争」も学生がユーモアをもって対抗しているところが実に微笑ましい。

先の5月に京都国立博物館で開催された池大雅展を見ました。池大雅は，京都生まれで江戸時代中期に自由なスタイルで活躍した文人画と呼ばれるジャンルの絵師です。彼の描いた人物画でも風景画でも，また書にしても，実にのびのびと表現されていて，見る人をすがすがしい気分にさせます。与謝蕪村との合作，「十便十宜図」のそこはかのないユーモアも独自のものがあります。旅の画家と言われるほど旅を愛し，富士山も沢山描いています。彼の自由闊達さは，京都の地の文化と無縁ではないでしょう。

この大雅の弟子に木村兼葭堂がいるのを本展覧会で知りました。兼葭堂は大坂の商人ですが，文学，本草学，物産学に通じ，書画も嗜む博学多才の人で13歳の時に26歳の大雅に弟子入りしている。長じて，書画，骨董，書籍，動植物，鉱物標本などのコレクターとなり，それを求めて，文人墨客，医者や本草学者，大名などいろんな人が訪れ，一大サロンを形成していたと言います。有名どころでも，上田秋成，司馬江漢，太田南畝，頼山陽，大槻玄沢，本居宣長，円山応挙，伊藤若冲などで，蕪村も訪れています。先の「十便十宜図」もこのサロンが契機での合作かもしれません。

こういう異分野の交流ができる場所は，現代の様に複雑な世界になればなるほど重要で，ここから新しいものが生まれる可能性が大いにあります。iPS細胞も分子生物学とは畑違いの工学部や獣医師が研究チームに加わり，前例に因われる事なく研究をすすめていたそうですね。こう考えると，現代の大学は，尖った専門家を作るだけでなく，こういう異分野の交流の器を用意して触媒の役目を果たす事も役割のひとつではないでしょうか。

（はやし まさたか，東芝プラントシステム株式会社代表取締役社長，
昭和54年工学部卒業）

[目次に戻る ↗](#)

随 想

出前授業「宇宙太陽発電所」

名誉教授 橋本 弘藏



京都府教育委員会が実施している出前授業、「子どもの知的好奇心をくすぐる体験授業」に協力している。退職した年から始まったようである。授業内容は「宇宙太陽発電所（宇宙太陽発電）」で、静止衛星の軌道に太陽電池で電気を作り、マイクロ波という電波で地球にエネルギーを送るシステムである。炭酸ガスを出さず、クリーンな電源として注目されている。24時間発電できるので、地上の太陽光発電よりも多くの電気が作れ、ひとつの衛星で原子力発電所1基分くらいの電気を作る。地球温暖化、エネルギー問題、発電、電波、人工衛星、無線電力伝送なども含めた内容としている。ほぼ年1回、パワーポイントを用いた授業を行ってきた。

最初の年は、中学校であった。一般向けや高校生に話したことはあったが、初めてのことであった。生徒たちの目が輝いていたのが印象に残っている。次の年は、小学校6年生。履修内容を調べたり、ひらがなを振ったりして準備した。小学生には初めてなので、どこまで理解して貰えるか不安であった。終了後に、このことを初めて耳にしたとは思えない、素晴らしい質問が出て満足できた。のち程、校長先生が感想文を送って下さった。難しいけど楽しかったとか、勉強になったとか、同時にした太陽電池や原発、電力の輸出などの話に対する感想もあった。良く聞いており、頼もしい子供たちであった。

最大の挑戦は小学校4年生。しかも7月であった。理科の授業が始まるのは3年生からで、何を知っているのだろうと不安になった。そこで、事前に担当の先生に学習内容を伺いに行くこととした。太陽電池への光の当たり方で出力が変わる実験をやっており、太陽の1日の動きや影のつき方も習っている。地球温暖化の話もしているとのこと。環境問題や地上と静止軌道での発電量の違いも理解できる。これで話ができる目途が立った。当日は、こども環境白書を使って温暖化の話や、こども向けの図鑑等に紹介されていた宇宙太陽発電所を含む図なども追加して、地上太陽光発電やその他の発電を説明した上で、宇宙太陽発電に関連する事柄について話した。10分の休憩を挟んで、45分を2回。マイクを使わなくても静かに聞いてくれた。質問もあり楽しい経験となった。後日、当日の写真とともに、児童によるお礼や感想を書いた手紙55通が送られてきた。地球温暖化、節電、太陽光、太陽光発電、ソーラーパネル、宇宙、原子力・火力・水力・地熱発電、マイクロ波、宇宙太陽発電などの授業内容に言及されていた。資料は何も渡さず、見聞きしたことから書いたもので、素晴らしい経験であった。

専門分野である電波やアンテナの話は理解されにくいので、周辺の話が主体となっている。最近も話題になることの多い、これらの事柄に興味を持ってもらえるきっかけを作ることができれば有意義と考えている。当初は高校生に話すのが中心と思っていたが、小中学校で話すのも楽しみである。ただ、小中高と上がって行くにつれ、子供たちの目の輝きが減っていくのは、考えさせられる。

（はしもと こうぞう、平成22年退職、元生存圏研究所教授、専門は電波工学）

[目次に戻る ↗](#)

洛書

力は断層を動かし、
そして大地を動かす

林 為人



京都大学創立記念日である2018年6月18日の午前7時58分、桂キャンパスの所在する西京区の我が家でも、「ガーン」という下から突き上げられるような地震動に見舞われた。モーメントマグニチュード(Mw)5.5(気象庁マグニチュード(Mj)6.1)の大阪府北部地震で、西京区の震度は5強であった。日本列島は4つのプレートのぶつかり合うところに位置し、多くの地震が発生している。年間数cm程度のプレート運動により、地殻の中の弱面である陸地地下の活断層や海底下のプレート境界断層には、力と歪みが貯まっている。その力が断層の耐えられる限界を超えると、断層面は破断し、地殻に貯め込まれていた力とエネルギーが一気に放出されて地震となる。大阪府北部地震で放出されたエネルギーは、2011年に発生した東北地方太平洋沖地震(Mw 9.0)のエネルギーの約200,000分の1で比較的小さいものであったが、それでもその凄まじさには言葉を失った。

私の研究テーマの一つは、地殻中の力(専門用語で言えば、応力)を計測することである。これまで、石油・天然ガスなどのエネルギー資源の開発に係わる応力計測研究のほか、地震断層と応力の関連についての研究に没頭してきた。日本海溝近くの深海で行われた、東北地震後の震源断層掘削調査プロジェクトに参加して、あの巨大な津波を引き起こした断層の極めて大きな滑りには地震時の応力解放が加担したことを見出すことに成功した。しかし、地下深部の応力を計測することは技術的に難しく、学生と共に各種調査現場を訪れ、岩石の掘削コア試料などを使い計測にトライしているが、意味のあるデータが取れないこともしばしばである。理屈的には、断層を動かす力の時空間分布と断層の強度を正確に計測することができれば地震は予知できる。しかし、我々の現在の技術のレベルや予算の制限などから、無念にもこの目標にはまだ程遠いと言わざるを得ない。



2016年の熊本地震に伴う断層のずれ

最近、別の調査研究において、熊本県益城町で2016年4月16日に発生した熊本地震の震源断層掘削孔で水圧を観測していた。2018年7月中旬に観測データを回収したところ、なんと大阪府北部地震の震源から直線距離で約500km離れた益城町でも、その地震による水圧の変動が、地震の発生時刻より約2分遅れて捉えられていた。地震動は約2

洛書

分でその距離を駆け抜けたのである。大阪府北部地震では断層の破壊が地表に現れていないとされているが、熊本地震の本震（Mw 7.1；Mj 7.3）に伴って発生した地表断層は断続的に約 28 km 続いたとされる。その断層の運動は、主として断層面の両側が相対的に水平にずれたもの（横ずれ型）で、顕著なところではその相対変位は約 2.5 m であった。前ページの写真は、2018 年の夏に益城町で撮影したものであり、畑に植えてある作物の段差は地震により大地が大きく動いたことを語っている。作物は地震発生時のまま残っているのではなく、大地のずれにより直線の土地境界が折れ線状となったため、その後、畑の所有者がその変形した畑に作物を植えざるを得ないのである。

このように断層を動かし大地を動かす力を正確に測りたいとつくづく思うのである。

（はやし ためと（通称：りん うえいれん）、大学院工学研究科教授、
専門は地質工学と岩石力学）

[目次に戻る](#) ↗

話題

平成 30 年度総長杯（卓球大会）を開催

7月6日（金）に18チームのエントリーで開催を予定していた平成30年度総長杯卓球大会は大雨のため7月9日（月）に順延となり、17チームの参加となりました。当日は例年通りの蒸し暑さでしたが、会場となった総合体育館（地下1階卓球場）は白熱した試合展開と熱のこもった声援で大きな盛り上がりを見せました。決勝戦は、医学・病院構内共通事務部「ななめのみち」（代表者：今井敦宣）チームが、数理解析研究所の「数理解析卓球所」（代表者：岸本典文）チームを2対1で下し、見事に優勝しました。試合終了後の表彰式では、宇野圭助 総務部人事課 福利厚生室長から優勝、準優勝チームに賞品が贈られました。



優勝した「ななめのみち」チーム



準優勝した「数理解析卓球所」チーム

（総務部（人事課））

[目次に戻る ↗](#)

北部構内「子ども見学デー 2018」を開催

8月3日（金）、北部構内において「子ども見学デー 2018」を開催しました。

「子ども見学デー」とは、子どもたちが親の職場を見学し、親子のふれあい・理解を深める機会とするもので、ワークライフバランスを推進する北部構内独自の取り組みです。今年で5回目の開催となり、北部構内では毎年恒例のイベントです。北部構内に勤務する全教職員の子どもたち（小学生）が対象で、今年はその兄弟姉妹の未就学児を含めた5歳から12歳の26名が参加しました。

今年のテーマは「謎に包まれた京都大学を調査せよ!!」。子どもたちが調査隊員となり、旧演習林事務室、馬術部厩舎、理学研究科の天文台や実験室、農学研究科の農園を巡りました。



餌やり体験



空に見える星の説明をする野上准教授と子どもたち

話題

馬術部厩舎では学生部員より馬の説明を受け、餌やり体験を行い、天体望遠鏡では野上大作 理学研究科准教授から望遠鏡や星空の解説を受け、また、化学実験室では阿部邦美 技術専門員らの指導による野菜の色素実験を行いました。最後に、石割京大農園では間藤 徹 農学研究科教授の説明を聞いた後、野菜の収穫を行いました。

当日は大変気温の高い日でしたが、子どもたちは大きい馬や見上げるほどの天体望遠鏡に興味津々でした。修了式では一人ずつ自分の調査結果を報告し、上原孝俊 北部構内事務部長から修了証が手渡されました。夏の暑さに負けない、子どもたちの輝く笑顔を中心に、保護者の教職員、スタッフと記念撮影をして、「子ども見学デー 2018」は幕を閉じました。保護者の職場について子どもたちの認識が深まる良い機会となりました。



抽出した色素を確認



農園で採れたスイカの試食



上原事務部長より修了証書を授与



親子で集合写真

(北部構内事務部)

[目次に戻る ↗](#)